
新・紅倉美姫 入りたがる女

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新・紅倉美姫 入りたがる女

【Nコード】

N8761U

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

ちよつとだけリターンズ。このお話はホラーとは名ばかりのコメディーです。いえ、ちゃんとシリアスな幽霊は出てくるんですよ？
なのに脅かされ役のこの女が……。ぜんつつつつつつぜん、怖くありませんが、それは作者のせいではありません。みんなこの女のせいです！

1 エレベーター

その日タウン情報誌の編集者である田中卷子（たなかまきこ）は締め切り間際で残業して帰宅は深夜になった。

彼女は賃貸マンションに住んでいる。26歳、独身である。

バス通勤の彼女は、バスなどつくになくなってしまっていて、仕方なく贅沢にタクシーを使ってマンションに向かっていたのだが、運転手は表の大通りから卷子に指示された枝道に曲がるうとして、「おや？ お客さん、ここ入れませんよ？」

「え？」

見ると、道路を何か工事をしていて入り口をふさがれていた。

「ああ、そういえば夜間工事をするって看板が出てたかしら」

深夜の時間帯で、まさかそこまで遅くなると思っていなかったからすっかり失念していた。それというのも新人の女子編集者の原稿がとても使えた物じゃなく、先のこともあるので先輩の卷子がマンツーマンで指導して、おかげで自分の仕事がつかり遅れてしまったのだ。元々女性中心の編集室ではあるが、男連中は新人のかわいこちゃんにちやほやと甘いし、ベテランのお局（つぼね）女子はかわいい若い女の子に必要以上にきつく当たるし。ああまったく、なんだお荷物をしよわされてしまったわ。あの子だって今はかわいく殊勝に先輩の言うことにいちいち「ハイッ。ハイッ。」と返事をして従っているけれど、どうせ職場を退ければ友達に携帯電話で口うるさい先輩の悪口なんか言いまくってるんでしょね、ハアッ………。

深夜で車の通りもまばらで、タクシーは右折レーンで止まって卷子の判断を待っている。

「少し先に行けば入れるから裏からグルッと回ってこられますよ？」

「ああ、いいわ。どうせすぐそこだから。すみません、そこら辺で止めてください」

「はい」

タクシーは道路を左に寄せて、停車した。

卷子は歩道を少し戻って赤信号の点滅している横断歩道を一応左右を見て渡った。アルバイトらしき茶髪のお兄ちゃんが頭を下げてこちらへと誘導して、卷子は鉄板を渡した足場を渡って路地に入った。工事はおきまりの電線の地中埋蔵化のためらしい。

50メートルほど歩けば、卷子の我が家、

？

「リオパレス12」

？

が建っている。

なんだかパチモン臭い名称だが、建物はしつかりしている。鉄筋コンクリート、12階建てのモダンな高層マンションだ。出入りもタッチパネルの暗証入力で管理されている。

深夜の住宅街はひっそりしている。多少の不安感を覚えながら足早に歩いていった卷子は、建築関係の事務所の駐車場に、隣家のブロック塀と電信柱の陰に、

白いワンピースを着た女が立っているのに気づき、思わず足が止まった。

女は長い髪を垂らしてうつむき、風に揺れるように重そうに頭をもたげ、その顔を……

卷子はさっさと歩き出し、足早に、走るようにしてマンションのエントランスのひさしの下に入ると、ようやく振り向き、誰もいないのにほっとして、暗証番号を入力し、強化ガラスのドアが開いた。卷子は駆け込み、もう一度背後を確認し、確かに誰もいないのを見た。

ホールの奥のエレベーターに向かい、「上」のボタンを押した。

エレベーターは最上階12階に止まっていて、12、11、10、9、8、・・・と数字が下がってきた。

ガクン。ゴー…。

オレンジがかった茶色のドアが開き、卷子は乗り込んだ。中のパネルに手を伸ばしながら振り返ると、すぐ後から女が乗り込んできた。間近に面と向かい合って、卷子は思わず固まった。髪の毛の長い、白いワンピースの女だ。年は自分より少し上だろうか？ 不健康な青白い肌をして、ギョロンとした目玉で卷子を見ている。卷子は思わず後じさって女を箱の中に招き入れた。じっと自分を見る女を気味悪く思いながら卷子はパネルの「4」を押した。卷子の部屋は405号室だ。女の背後でドアが閉まる。空気が閉ざされたのがひどくはつきり意識されて、エレベーターは上昇を始めた。

「何階です？」

卷子が訊くと、女は無言で手を伸ばして、卷子はまた後じさった。女の白い手は引っ搔いた跡のようなみみず腫れが何本も重なっていた。

女は「12」を押した。

女はドアの前をよけ、卷子の隣に立った。

卷子は心臓をドクンドクンと高鳴らせながら考えた。エントランスに入るとき、後ろには確かに誰もいなかった。するとこの女は自分がエレベーターを待っている間にエントランスを入ってきたのだ。……ドアが開いたような気配はなかったが……それじゃあホールに通じる通路の中にいたのだろうか。……何の理由でそんなこそこそ隠れるような真似をしていたのか知らないが……1階の住人でもないのだろうし……ま、いずれにしてもこのマンションの住人であるのは間違いないだろう。

4階に着き、ドアが開いた。卷子はドアにぶつかるようにして外に転がり出て、カツカツと廊下を歩いて、振り返った。

ドアが閉まっていき、中に確かに女がいるのを見て、ドアが完全に閉まってパネルの数字が上昇していくのを見て、はぁー………、と深い息をついた。

12階の住人だった。それだけのことだ。

卷子は自分の部屋、405号室のドアノブにキーを差し込み、ドアを開けると、もう一度振り返って、部屋に入った。ガチャン、と、つまみを回してロックした。

2 窓

卷子はシャワーを浴びて脱衣所兼洗面所から出てきた。キッチンがあり、奥のリビングへ床続きになっている。パジャマを羽織り、バスタオルで濡れた髪をくしゃくしゃ拭きながら、冷蔵庫から「第3のビール」の缶を取り出し、プルを開けるとグビツとまずは一口あおった。

「くう〜、生き返るなあ〜」

どうせ見ている者などいないので思い切りオヤジ臭いセリフをはいてグビグビあおった。夕飯は軽く差し入れのおにぎりを食べただけが、さすがにもうがつり食べる元気もなく、これで代用、後は年頃の乙女らしくしつかり歯磨きして、さっさと寝てしまおうと思った。明日も通常通り8時出勤だ。

ぐびぐびあおりながら、ふと、奥の窓のカーテンが3分の1ほど開いているのに気づいた。白い、紫外線よけの、外から中が見えにくいブラインド機能の優れ物だ。4階程度の高さではシャワーを浴びてうっかりバストをご解禁したまま窓辺に寄って、たまたま近所の2階で机にかじりついている受験生と目が合ってしまうなんて恥ずかしいことがないとも限らず、以来卷子は（フツ……）カーテンだけはしつかり閉めることにしていた。さつきも帰ってきてまず窓のカーテンを閉めて回り、しつかり閉めたつもりだったのだが……。

3分の1開いたカーテンから真っ黒な窓ガラスが覗いている。

歩いていって手を伸ばすと、頭に電灯を受けた自分の顔がうつすら映るガラスの向こうに、何かだらだらした物が垂れ下がっている。なんだろう？上の部屋の洗濯物でも落ちて引っかかっているのだろうか？、オヤジのステコだったりしたら嫌だな、と思いながら目を凝らすと、垂れ下がってるそれが、ズル、と一段下がって、卷子はおっと思わずびっくりのけぞった。なんなのだろう？……

よく見ていると、それは、

だらだら垂れ下がった女の長い黒髪で、

その髪の中に逆さまになった女の顔が卷子を見ていた。

卷子は思わずカーテンを握りしめると、ザッと素早く閉めた。じつと一拍置き、サッと開けると、

女のギョロリと剥いた目がガラス越しに卷子をガン見していた。

卷子は再びカーテンを閉めた。

「ウ~~~~~ム」

疲れているのだ、これは幻だ、わたしは逆さお化けという幻を見ているのだ、

と、無理矢理でも思いたいところだが、アルコール好きでテンションの上がったこの状態でわざわざそんなシニールかつ不気味な白昼夢（深夜だけど）を見るとも思えない。卷子は、

外の女がどんな格好で窓を覗き込んでいるのか、全体像を思い描いた。

「妖怪イモリ女」

思わず目が三日月になり、ムフツ、と、笑いのツボに入ってしまった。ううこれはいかん、一気に酔いが頭に回ってしまった。壁にべたつと張り付いて、股を開いてワンピースの裾がまくれ上がってパンツ丸出しになっていたりして。髪の毛だつて垂れ下がっているんだから逆立ちしてスカートだつてまくれ上がるはずだ。ゆ、幽霊のくせにおパンツ丸出しで、外から見たらただだけ恥ずかしいのよ？「ヒ、ヒヒヒ、アヒヒヒヒヒヒヒ、い、いかん、祟られる、で、でも……、おパンツ丸出し。アハッ、アハハハハハハハ、ヒ、ヒイ~~~~、く、くるしい~~~~、だ、だめ……、ギャハハハハハハハハハ~~~~、たいして面白いギャグとも思えないが残業のナチュラルハイに安いアルコールの入った卷子の頭は女子中学生並にギャグに対する感性が幼稚になってしまっていた。可笑しいといったん思ってしまうとどうしようもない。ヒイヒイ腹を押さえて笑い転げ、おいこら笑ってる場合じゃないぞ！、と頭の冷静な部分がツツコミを入れるの

だが、だってだって、

パンツ。

キャハハハハハハハ。と、もうどうしようもない。

ヒイヒイ笑いながら床を這って窓から離れた卷子は、自分をガン見した女の顔を思い出し、ようやく、そうだ、あのエレベーターのワンプリース女だ、と思い至り、ハツと笑いを止めた。

やっぱりあれは幽霊だったんだ。なんてはつきりと自己主張の強い幽霊かしら。

幽霊なんて物は見える人にしか見えない物で、見える、というのはそれだけ幽霊とその人と意識が接近している証拠なのだ。と、以前地元の心霊スポット巡りという企画を立てたとき一応さつと心霊現象の基礎知識を稲川淳二だのつのだじろうだの読んで勉強したことがある。企画は「キモイ」ということでボツになったが。

いやあ…、笑ったりして拙かったかなあ…、と、今更ながら酔いが醒めた。ちくしょう、このままいい気持ちにまどろんで眠りにつく予定だったのに。

「そうだ、寝よう」

と思った。今更また窓を覗きに行つてまだそこに張り付いていたらなんと言つていいやら

「ご愁傷様です」

なんて、怒られるわね、と、触らぬ神に祟りなし、ここは完全シカトを貫こうと決めた。

生きた人間がロープでぶら下がって…なんて、この深夜にそんなアホなイタズラしている変質馬鹿女もないわね。はいはい、幽霊幽霊、よかったよかった。幽霊なら窓の外に女が逆さまにぶら下がっていたって警察に通報する義務もないものね。

卷子は洗面所でスーパーストロング洗口液でブクブクやって歯磨きの代用にした。もうのんびり歯磨きしている気分でもない。鏡もできるだけ見ないようにした。自分の美しい顔の代わりにあのぎよる目女の顔があったら嫌じゃない？悪夢に見ちゃうわよ。というわけですわねー、と、さりと流した。

「おやすみなさい」

わざわざ声に出して宣言して卷子はベッドルームに向かった。すると、

ピンポンとチャイムが鳴った。

卷子は空耳ねと思ったがチャイムは再び鳴り、卷子はむつつりした。

ちつくしよお、あくまでわたしに存在を認めさせたいわけ？

嫌よ、お化けなんかとお知り合いになったらますます男が寄ってこないじゃない？

卷子はピンポン、ピンポン、と鳴り続けるチャイムを無視した。入り口のセキュリティがしっかりしているので（幽霊には効果無かったが）インターホンはなく、チャイムは部屋の外のスイッチを押すしか鳴らない。その人物もドアのぞき穴から確認するしかない。ピンポン、ピンポン、と鳴るチャイムのうるさにイライラしながら、のぞき穴を覗きたい誘惑を感じながらも、そこにあのぎよる目が覗き込んでいるのを想像して、絶対目なんか合わせてやるもんですか、と思った。

ピンポン、ピンポン、と鳴っていたチャイムがようやく止まり、卷子は、

「フツ、勝ったわ」

とほくそ笑んだ。ところが、

今度は居間のサイドボードの上に置いた携帯電話が鳴りだした。

卷子は

「チッ」

と舌打ちした。

3 テレビ

電話を掛けてきた相手は予想通り非通知だった。

バツキヤロー、番号知らせてくれば幽霊の電話番号としてネットにさらしてやるものを、とだんだん卷子は考え方のガラが悪くなってきた。

本当に誰かが急用で掛けてきたことも絶対には言えない。しかしそれならそれで非通知設定にして怪しまれる相手が悪いのだ。しつこく鳴っていた呼び出しがようやく切れた。

ざまあみろと思い、今のうちにさっさと留守電に切り替えた。案の定また呼び出しが鳴り出し、卷子はにんまりした。呼び出し音は最初の設定通りの電子音だ。ああ着歌なんか入れておかないでよかったわあと、余裕で鳴る電話を見ていた。じきに呼び出しが止まり、「ただいま電話に出られません。用のある方は発信音の後にメッセージをお残してください」と女性オペレーターのきれいな声が言った。さあてどうするかしら？メッセージを残してくれるならそれも是非ネットにさらしてあげなくては。スピーカーオンにした電話を眺めていると。

しばらく無言が続いた。ほらほら早くしないとタイムアップになっちゃうわよ？と思っていると、

「・・・ガ、ガガガガ、ガ・ガ・・・」

と、スピーカーからガリガリ引つ掻くような音が響きだした。卷子は悲鳴を上げた。

「うわあーっ、てめえやめやがれっ！、先週機種変更したばかりのスマートフォンだぞ、こうらああっっ！！！」

卷子は新品のスマートフォンを取り上げ、思わず画面に向かって怒鳴った。

「プツ。」

巻子の剣幕に恐れをなしたのか、ただ単に設定の時間が過ぎたのか、メッセージ録音は終わった。

巻子はゼーハー肩で息をして、壊れちゃいないでしょうねえ？と心配した。メッセージ再生なんかして増長されたら堪らない、さつさとファイルをゴミ箱ポイした。

このしつこさ、これで終わりとは思えない。

エレベーター、窓、チャイム、携帯電話と来て、

次はテレビか？ ベッドか？ シャワーはさつさとすませておいて良かったわ、と思った。

まずはテレビか、と睨み、先手を打つことにした。

テレビをつけ、ぐだぐだの深夜番組なんて無視してDVDプレーヤーに切り替えた。本棚の一隅のライブラリーからある一本を取り出すと中身を取り出しセットした。さつさとメニューを出してチャプター選択にした。

「これでどうだ」

映画の最後の方を選択して決定した。

キシキシイインンン・・・

と、何とも言えない不気味な音が響き、テレビ画面に荒い画像で古い井戸が映った。

その井戸から……………

最高の恐怖シーンで、巻子は言った。

「3Dもやっぱりビエラですね」

卷子は美人ハーフキャスターを気取ってニツコリ言い、

テレビではひげ面の二枚目中年俳優がのけぞって床をはいずりながら恐怖の表情を浮かべ、

卷子はアハハハハと自分で受けて笑い声をあげた。

・・・えー、

幽霊もなんのことやら戸惑うと思われるので解説すると、

世はデジタル3Dテレビが大流行である。高くても買えないけれど、会社で昼休み話題になって、誰がCMキャラクターをやったら面白いかという話になった。そこで

「そりゃあやつぱり、『あの』人だろう？　なんてつつてテレビから・・・ねえ？」

と大受けしたのがかの日本が世界に誇る最恐ジャパニーズホラームービーの、あの、お方である。パチンコにもなつてテレビのCMにも登場して今やお茶の間の老若男女知らぬ者はない人気者（？）で、今さら表現をばかす必要もない気もするが、そこは雑誌編集者であるので厳しく自主チェックである。

仲間内では受けたし、現在卷子も一人で「うひゃひゃひゃひゃ」と笑っているが、果たして幽霊に生きている人間のユーモアを共有する感性が残っているものかどうか。幽霊の気持ちなんて霊能力者でもなければ分からない。

「うひゃひゃひゃひゃ。ここでかぶつて出て来ちゃったら大笑いだわね。出てこられるものなら出て、いらっしやーい」

笑いながら幽霊を挑発するようなことを言つて、どうやらまだ相当酔いが残っているようだ。

これまた一世を風靡したTK氏の手になるテーマ曲が流れ出し、卷子はすっかり和んでしまった。ちなみにこの映画、中1の卷子がクラスメートの男の子と初デートに見に行った映画で、満員の映画館はそりゃあもう女子達の悲鳴が響き渡りにぎやかなものだった。楽しいデートだったが、その男の子とは中2のクラス替えて別れてその後自然消滅してしまった。懐かしい甘酸っぱい思い出の映画で

ある。

エンディングを最後まで見終わり、卷子は大あくびをした。

「ふあゝゝあゝ。あー、見た見た。さ、寝よつと」

甘酸っぱいファーストキスの夢でも見ようかしらん？なんて半分眠った頭で思いながら布団に入ろうとした卷子は、うん？と思い出した。

「そうそう、ここにも予防策」

天然緑茶の香りのリセッシュをたっぷり噴霧し、バタバタ夏の薄掛けを扇いだ。忙しさにかまけて掃除をさぼってほこりが気になるが、幽霊というのは不潔なところを好むそうで、これだけ爽やかな香りをこつてりふりまけば、出てこれないだろう。

爽やかな緑茶の香りの幽霊だなんて……。

卷子はまた笑いのツボにはまってしまわないうちに明かりを常夜灯に切り替え、目を閉じた。

おやすみなさい。

・・・・・・・・・・・・・・・・

果たしてこのままこのお話は終わってしまうのだろうか？

4 冷気

布団に入りまどろみかけた卷子だが、あたしても『うん?』と目を開けた。肩の辺りがざわつとして、寒い……。卷子は布団をつかみ、肩を抱くように丸まった。顔を冷気が撫で……………

「……寒いじゃないの」

むつつり起きあがった。今度は本格的に眠くなったのを起こされてマジでいらついている。

「うつ、寒っ」

布団から起こした上半身が、腰から背中、肩までまんべんなく寒い。

こ、この冷気はいつたいどこから……………

卷子は振り返った。

「……………」

ゴォー……、と、

エアコンが全力で冷気を吹き出している。

卷子は枕元のリモコンを手に取り、

「いったい何度に設定しちゃったの?」

と、ブツブツ、きつと寝るときに腕が当たるかしてスイッチを入れてしまったのだろうと確認した。

「12度。節電節電のご時世にまったくけしからんわだしだな。いくらナマモノでも美女を冷蔵してどうすんのよ」

しつかり28度に設定し直して、電源スイッチを押した。

「おやすみ」

リモコンを放り出し、布団をかぶったが。

エアコンは止まることなく冷気を吹き出し続けた。

まあ……

だいたいどういふことか見当はついているのだが……。

卷子はガバツと起きあがり、その勢いそのまま振り返った。

「ええーいつ、このアンチエコ運動の商業至上主義者め！」

社会派らしくかつこよく見得を切った卷子の前に、

カーテンを背に、髪の高い白いワンピースの女が立っていた。

「ここで一句。」

幽霊だけに 冷氣と共に 現れり。

おそまつさまです」

白いワンピースの女は顔の側面に垂らした髪の間から、ギロリ、と、しやれにならない恐ろしい目で卷子を見下ろしていた。

「うっぎゃあーっ！！！！」

卷子は大声で悲鳴を上げ、布団を蹴立て、ベッドから転げ落ちるようになて逃げ出した。

キッチンに出て、

「わたしのガガさま」

居間に新品スマートフォンを取りに行こうとしたが、向こうの引き戸からゆらりと女の横顔が現れた。

「うっぎゃあーっ！！」

卷子は再びあられもない悲鳴を張り上げ、もう取る物取りあえずの余裕もなく玄関でご近所用のサンダルを突っかけると慌てて鍵を外し外へ飛び出した。バタアン！とかなり激しい音が響いたが、深夜のマンション内は静まり返り、誰かが起き出してくれるのを待つ間もなく、鉄のドアからシュー…とドライアイスが吹き出し、女の姿が現れた。

「うっぎゃあっ！」

卷子は一目散に…、階段へ駆け上った。

ダダダダンッ、と激しく足音を響かせて駆け下り、この騒音にさっさと誰か起き出してくれないかしら？と思った。若い乙女が悲鳴を上げているというのに知らんぷりだなんて、まあ！まったくなんて事なかれ主義の冷たい世の中なのかしら？と思いつつ、誰かが出てくるのを待つ余裕もなく、さっきの顔はマジで怒っていたわ、と駆け下りながら思い出す。……まあ、さんざん嫌がらせをして笑

い物にしたから、そりゃああつちもマジで怒るわね……。それに、夜中こんな大声を出して騒ぎになったら、わたしの敏腕編集者としてのキャリアはどうなるの？……まあ大新聞の編集じゃあなく、ほんわかアットホームなマイタウン情報誌だけださ。幽霊なんか見える人にしか見えない物なんだし、寝ぼけて幽霊騒ぎを起こしたなんて仲間に知られたらいい笑い物だ。

1階まで駆け下りた巻子は、そのままエントランスの外へ駆け出した。閉まったガラス戸の向こうを見ると、女の幽霊は曲がり角を曲がってエレベーターの前をこちらに向かってふわふわ滑るように進んできた。ああ貞子さんみたいに「グリッ、グリッ、」という歩き方じゃないのね、あれは首とか肩胛骨とか痛めそうだものねえ、なんてくだらないことを考えている間に二重ドアの向こうのガラス戸をすり抜け、さらにこちらに迫ってきた。

巻子はもう悲鳴を上げるのも白けてしまつてとにかく走った。

大通りに向かつて。

5 光を求めて

電線地中化の埋蔵工事はまだ続いていた。表通りはたいてい店舗や事務所が並び、それにしてもけっこう「ガガガ」とドリルの削る音が響いてくる。

手持ちぶさたで誘導灯をぶらぶらさせていたアルバイトの茶髪兄ちゃんが血相変えて走ってくる巻子を見つけてびびった。

「ちょ、ちよつと、あなた……」

巻子は彼の前で膝に手をやりゼエゼエ息をつき、固いつばを飲み込みつつ訊いた。

「だ、誰か、変な女が追いかけてこない？」

巻子は彼を盾に隠れるようにして、

「変な女ですかあ？」

人間の盾にされた彼は「それはおまえだ」とでも言いたいところを、律儀に巻子が逃げてきた路地を見やり、

「いやあ、誰も来ませんよ？」

と言った。

「本当？」

巻子は陰からこそそ奥を眺め、女の姿がないのを見ると、安心してため息をついた。

「だいじょうぶすかあ？」

聞きようによつては、「タイソウ ブスカ？」と聞こえないこともない。失敬なやつめ。

巻子は鼻息荒くふんぞり返った。

「ええ。大丈夫よ。マンションに入るときから後を付けてきた女がいるのよ。それが部屋まで入ろうとしてね」

「ええっ！？ そりゃあ大変じゃないすかあっ！？ け、警察呼びましょう！」

「あつ、いや、それはマズイ……」

「はあ？」

勤労青年は不思議そうな、と言うか不審そうな目で卷子を眺めた。髪を振り乱して……シャワー浴びてタオルで拭いただけで横になったんだからしょうがないじゃない……、すっぴんで……悪かったわね！……、パジャマにサンダル履きで……それだけ慌てて逃げ出したのよ！……、怪しい挙動不審者に見える。しょうがないじゃないの！幽霊なんて言っただけで信じるう！？

若者にジロジロ見られ、取りあえずここにいれば幽霊は寄ってこないと安心した卷子だったが、どうにも居心地が悪い。ちなみに卷子の着ているパジャマは黄色の、満開のひまわりがでかでプリントされたプリーティーな物である。

けっきょく、フンツときびすを返し、

「様子を見てマンシヨンの警備会社に調べてもらっわ」

と、どこかで電話でもかけるようなふりをして歩道を歩き出した。「あ、それがいいっすよ。俺もここで変な女がいないか見張ってますんでえ」

と、若者もニコニコ送り出してくれた。役に立つだろうか？鈍感そうで靈感なんてでんでなさそうだが。

とぼとぼ歩き出した卷子は、ああそうだわ便利なお財布機能も付いたスマホを置いてきてしまったのだわ、と思い出した。

「ほらほら、お財布携帯なんだよ〜ん」

とコンビニでいい気になって同僚に見せびらかしたのんきな過去の自分が恨めしい。すっかり財布なんていらないわよ〜んという気になっちゃったじゃないか。グスン。

ともかく他に行く当てもないのでよく利用しているこの先のコンビニに行くことにした。他に明かりのついている建物は近くに見あたらない。

あーあとため息をつきながら何気なく振り返ると、白いワンピースの女が工事現場を後に歩道をしずしず歩いてくるじゃないか！

あのアホたれがあゝ、なあーにが「見張つてますんでえ」だ、
 やっぱ使えんじゃないかあー！

白いワンピースの女はしずしずとした動作で、まるで動く歩道に乗っているようにスムーズにこちらに迫ってくる。くっそー、手抜きのアニメじゃあるまいし、ちゃんと一歩一歩歩いてきやがれってんだ！

泣きたい気分が悪態をつきながら卷子は再び走った。疲れた。ゼエハアと呼吸が荒い。文字だけの描写なので彼女の名誉のために言うておくが、彼女は特に太っているわけではない。ただ日頃運動不足なだけである。

ああ、希望の明かりまで、あと……5メートル……ゴオオオー——
——ル……。――

店内に入つてしばらくして、頭のくしゃくしゃした冴えないメガネの兄ちゃんが出てきた。

「…らっしやいませ…」

最初の「い」が聞こえなかったのはゼエハア息をつく巻子のあられもない姿に驚いたというより、ボソツと、ただ単にやる気のないアルバイト店員だからだろう。顔なじみのおばちゃんだったら事情を話して助けを求められるのに、深夜の店舗におばちゃんが出てるわけないか。

巻子はとぼとぼと店の奥に入った。冷たい冷蔵庫の中に並ぶビール類を見てゴクリと飲み込む生唾も喉に引つかかる。ああ、お金がないって惨めだわ。恨めしく眺めながら、雑誌コーナーに向かった。取りあえず女の幽霊は巻子が人と一緒にいると出てこないようだ。ええいこうなれば明るくなるまでここで雑誌の立ち読みをし倒して粘ってやろうか。

店内に他に客はなく、バイト店員は奥の休憩室で見ていたテレビが気になるのか、さつさとなんか買つて帰つてくれないかなーと、迷惑そうな顔をしている。フン、誰が帰るか。おまえも一蓮托生、悪霊女の餌食になるがいい。

さあーで、どの本を立ち読みしてやろうかしら？　せつかくこう
いう特殊な状況下だから、ふだん読まない物を読んでやろう。……
男性物のエッチな雑誌……はひもで縛って読めないようになってる
から（そんなもん読んでたら間違いなく不審者だ！）、しょうがな
い、雑誌形態のお得コミックスでも読破してやろうかと手を伸ばし、
ふと、隣の棚に目に付いたタイトルがある。

「本当にあった怖い話」

卷子は漫画をやめて、それを手に取った。

6. 「ペンギン」

「本当にあつた怖い話」。

表紙のおどろおどろしい絵柄からしてお化け系の体験投稿雑誌だろう。そんないかにも怪しげな安っぽい雑誌を曲がりなりにも（地元では）有名出版社の明るく楽しいヘルシーなタウン情報誌編集員の卷子が手に取ったのは、幽霊に追われるなんていう健全な一般市民ならまず一生お目にかからないであろう特殊なシチュエーションから脱出する手だてはないかとわらにもすがる思いからだつた。

何か役に立ちそうな記事はないかとばらばらめくつていくと、目に付いたタイトルがある。

『 女につかれたわたし ?? 投稿者 東京都武蔵村山市 M I
X 命さん 』

ふむふむ、投稿者のペンネームは気に入らないが、とにかく読んでみよう。

『 もう十年も前のことになってしまいました。わたしは好きなM I Xのコンサートを静岡まで遠征して観た帰り、電車に乗りましたが、住んでいるのが東京とは名ばかりの田舎のため、乗り継ぎの途中で終電が終わってしまいました。ベテランファンなのでそれは計算のうちで、駅近くのパーキングにマイカーを止めてありました。深夜タクシーを利用するよりもずっと安いパーキング料金を支払い道路に出ると、まるで待っていたように向かいの歩道で手を振る若いギャルがいます。終電の終わった駅周辺にはけっこう若い遊び人達がうろついたりするものなのでそんな子の一人が、わたしがパーキングに入っていくのを見つけて送ってもらおうと追いかけてきたのだらうと考えました。』

わたしはコンサートで盛り上がってイケイケ気分になっていたので、窓を開け、取りあえずギヤルの体つきを観察しました。ところが驚いたことに、歩いてきたナイスバディーの彼女は、わたしが大ファンのMIXの、中でも大好きなマナちゃんそっくりのかわいい子ちゃんだったのです。わたしは興奮を抑えてさりげなくききました。「ヘイ、彼女、どうしちゃったの？ 何かお困り？」

彼女は微笑んで窓に顔を寄せて話しかけてきました。

「電車終わっちゃって困ってるんだあ。お兄さん、うちまで送ってくれないかなあ？」

彼女の息は甘酸っぱいレモンの香りがしました。わたしはさらに興奮を抑えなければなりませんでした。

「うーん、どうしようかなあ？ 家はどこ？ まだ遠いの？」

「八王子よ。駄目？」

「八王子かあー、ちよつと遠回りかなあー？」

わたしは彼女の「感謝のお礼」を期待してちよつとじらしてやりました。それで逃げられちゃったらもったいないですが、わたしはかなりドキドキして彼女の返事を待ちました。

「ねえお願い。朝までこんなところでうろろしてなくちゃ駄目なんてつらいよお。ね？ お願い、助けて」

具体的なお礼はいただけそうもありませんが、大好きなマナちゃんそっくりのギヤルをこんな所に置いておくのもしのびなく

「分かった。いいよ、送ってあげるよ」

と承知しました。

「わあ！ ありがとう、お兄さん！」

彼女は嬉しそうに言って車を回って助手席に乗り込んできました。隣に座られるとミニスカートから伸びた白い太ももが眩しいです。

わたしはかなり懸命に理性を保たなければなりませんでした。

そこはちよつとした若者文化の町で、彼女は女友達とクラブで遊んでいたのですが、友達の方は男にナンパされて途中でどこかに消えちゃったそうです。マナちゃんをナンパしないとは馬鹿な男です。

わたしがMIXのコンサートを観てきた帰りだと言うとわあ！いいですねえ！わたしも大好きですう！と言うのでコンサートの詳しい様子を微に入り細に入り解説してやりました。とても楽しいドライブでした。

さて八王子に至り彼女のナビゲートで郊外の道路を走っていくと、「あそこよ」

と指さします。

その家を見てわたしはちょっと驚きました。

銀色の、まるで空飛ぶ円盤みたいな家です。

なんなんだこのサイケでマニアックな家は？と思いましたか、となりがラブホテルだったのでなんとなく納得しました。

「ありがとう」

とお礼を言っただけ彼女は車を降りました。わたしは名残惜しく、ちよつと気にもなつて聞きました。

「ここで家族で住んでるの？」

「うん。姉たちと住んでるの。よかったら少し寄ってく？ 車だからお酒は出せないけど」

「うん、お邪魔します」

わたしは誘われるまま駐車場に車を入れ、彼女に手招かれて「プシュー……」とSFチックに上から開いてくるドアの裏側の階段を上がってUFOの中に入っていました。

そこは、めくるめく桃色の世界でした。まるで隣のラブホテルの部屋みたいです。

「あらいらつしゃい。お客様？」

MIXのマナちゃんには三人のお姉さんがいましたが、その三人は、なんと！、MIXの残りのメンバー、二ナちゃん、ルーナちゃん、リンナちゃんにそっくりで、彼女たちはなんとMIX四姉妹だったのです！

彼女たちはわたしにとってもフレンドリーにしてくれ、わたしは四人を相手にめくるめく一夜を過ごしたのでした。

帰り道のことはもう夢の中のように全く覚えていません。気がつくとなわしは会社の寮の駐車場で車に乗ったままぼうつとしていました。コンサート会場でグッズを買いあさるためにごっそり貯金を下ろしていった財布がなくなっていました。あまり気になりませんでした。まだけっこう残っていたのですが、買いあさったグッズはちゃんと残っていたので満足です。

翌日あの場所に行ってみました。隣のラブホテルはありましたが、彼女たちのUFOハウスは無くなって、ホテルの駐車場になっていました。

わたしが思うに、彼女たちは宇宙人だったのではないのでしょうか？

地球人の男の事を調べるために、実験対象の脳波を探って好みの女性のタイプを読みとり、その女性に変身して実験対象、つまりわたしに、近づき、まんまと自分たちの「実験室」に連れ込み、あれやこれやと肉体を存分に調べまくったのではないのでしょうか？ 何か痛いことをされた覚えはなく、とつても気持ちいい倦怠感だけが残っていました。彼女たちが宇宙人だったとしてもわたしは全然後悔していません。

もう十年も前のことです。わたしももう40になろうという年ですが、今もMIXの大ファンです。年離れた親にはあんたももういい年なんだからいつまでもおばさんになっちゃったアイドルなんて追っかけてないで、将来のことを考えてまじめに結婚相手を探しなさい、と説教されますが、大きなお世話です。あの夢のような一夜以来、わたしはすっかり女性に対するエッチな欲望がわかなくなっしまいました。きっと宇宙人の彼女たちに男性のエキスをすべて吸い取られてしまったのだと思います。けれど今もあの夜のことを全然後悔なんかしていません。

MIXはわたしの永遠のミューズです。全員結婚して子持ちになっても、わたしは永遠に彼女たちのファンを続けます。????おしまい
』

雑誌を握りしめる卷子の手がぶるぶる震えた。

「夢のような一夜だあーあー？ 夢なんだよ、ぶわあーか！ アイドルに憧れて現実見てねえんだよ！ いい加減目え覚ませやおっさん！ なにくっだらねえSFネタはさんでやがんだ、この大馬鹿編集者！ 財布取られて、ラブホテルでいいことしてもらったんだろー！？ 全財産巻き上げられて安心してんじゃねえよ、アホ！ ていうかラブホテルだったのか？ 最初から女の子がエッチなサービスしてくれる店だったんじゃねえのか？ この、ど阿呆ううー！！！」

卷子は怒りのあまりすっかり興奮してしまった。こんなアホな投稿、書く方も書く方だが、載せる方も載せる方だ。このアホ雑誌！ ハッと我に返ってレジカウンターを見ると、メガネのバイト店員があからさまな迷惑顔で、

「お客さん、深夜ですのでお静かに」

と注意してきやがった。卷子はすんませーんと頭を下げて、でも立ち読みをやめてやる気はない。

しかしこの雑誌は少しでもまともに役に立つのだろうか？………まあいいや、どうせ朝までの時間つぶしだから。でも徹夜は覚悟しないとなあ……、お肌に悪いわね、あーあ………。

ぱらぱらページをめくるがろくな記事がない。心霊写真なんて、『天井に浮かぶ怨念の絶叫顔』

って、今さら木目が人の顔に見えるっていったい昭和何十年代のネタだ？ おのれら雑誌編集者としてポリシー持つとるんかい！ ていうか、これはギャグ雑誌なのか！？ 全然怖くもねーし、明らかに「実話」じゃねえだろう？

卷子はページをぱらぱらやりながら、世の「心霊」という物に対する温度を思い知り、幽霊なんかに脅かされている自分が馬鹿馬鹿しくなってきた。

だいたい「うらめしやー」って出てきて、何がしたいわけ？ 幽

霊なんて出てきた時点が一番怖くて、出て来ちゃったら、それから何だって言うのよ？

そうよ、こっちが怖がつて逃げるから調子に乗って追いかけてくるけれど、幽霊が何するっていうのよ？ 貞子？ カヤコ？ トシオくん？ 花子さん？ そんな恐ろしい幽霊の「実話」なんか聞いたことねーぞ？ 実際の幽霊つて、けつきよく、「居る」っていうだけじゃない？ キャーッて逃げ出して、ああ怖かった、つて、そんな話ばかりじゃないの？ 存在が怖いだけで、実際、実害つてなんかあるわけ？ 運が悪くなったり？、体調がおかしくなったり？ まったく迷惑千万な、こっちが祟つてやりたいわよ！ 神社のお祓いにも保険が利けばいいのにさ。高いんでしょう？ お祓いって？ 神様もボリやがるわよねー、困った人間の足もと見て商売してんじゃないわよ、まったく、ぶつぶつぶつ……。

さてこれが現実を直視した結果の態度なのか、はたまたこれこそ現実逃避なのか分からないが、ページをぺらぺらやっていた卷子は、巻末近くの広告ページに目を留めた。

『 あ の、紅倉美姫先生が、あなたの心霊相談に乗ってくださいます！ 』

卷子は目を陰険に細めた。

なに？この高ビーな言いぐさは？ 胡散臭くく。

7、コンビニ part 2

『紅倉美姫（べにくらみき）』。

あー…、いたわねえ、そういう、『美人霊能力者』が、2、3年前までけっこうテレビに出てちやほやされていたわよねー。すっかり見かけなくなったと思ったら、こんなところで、こんなしょうもない怪しげな商売を続けていたんだ？

でかでかピースサインする写真が載っている。

あー…、確かにこいつだ。今どきピースサインだなんて、いったいつまでアイドル気取ってる気だ？

なんかやたら若くない？ まるで女子高生みたいじゃないの？

テレビに出てた時って、22とか23とか言ってたなかった？ 銀色の髪の毛（自称ロシアンハーフ）もばりばり巻きが入ってるし。…修正写真ね。でなきゃ昔の女子高生時代の写真よ。今はどんだけ老けていることやら。外国人は老けるのが早いもの〜。

フッ、おごれる平家も久しからず、テレビの人気者なんて落ちぶれば惨めなものね。

卷子は「どれどれ」とすっかり上から目線で広告を眺めてやった。

『かつてテレビで一世を風靡した紅倉美姫先生があなたの誰にも言えない悩みを一刀両断に解決してくださいます！

かつて史上最強の名を欲しいままにした美人霊能力者紅倉美姫先生。テレビから姿を消してその美貌を見ることができなくなっただけで嘆いていたファンも多いのでは！？

実は先生は日本を陰から操る悪の陰陽師と死闘を繰り広げ、このたび黄泉の国からリフレッシュしてこの世に再降臨なされたのです

！！ 見てください！この若々しい美貌を！！ まさに生まれ変わった剥きたて桃のお肌の紅倉美姫先生、霊能力もますますパワーアップです！！！！

紅倉美姫先生より一言

？？皆さん、ご無沙汰です。わたしの特殊な能力で一人でも多くの皆さんのお力になればと思っています。どしどし、相談をお寄せくださいね？

紅倉美姫先生に相談した体験者の言葉

<ついに結婚しました！> ● 渡辺京子さん 32歳

？？友人に悪霊が取り憑いて困っているのを紅倉先生に助けていただきました。わたしはちよっぴりそのお手伝いをさせていたでいて、それが縁で知り合った男性と恋に落ち、めでたくゴールインしました。キヤー。友人や両親に祝福されて、彼と二人、幸せな家庭を築いていきます！

<病氣から回復した> ● 森山宗景さん 66歳

？？わたしは日本画家の森山宗景である。当然知っておるだろうなおった。ところが紅倉先生に勧められた絵を購入してから不思議な夢を見るようになり、その夢に導かれるようにリハビリに励んだわしは、一皆当然承知のように、新作の大作を物にして華麗に画壇の中心に復帰したのじゃ。紅倉先生には感謝しとるよ、うん。

等々、

感謝と絶賛の声が多数寄せられています！

さあ、人知れず悩んでいるあなた！ 紅倉美姫先生がご相談に乗

ってくださいますチャンスです！

どしどしご相談ください！

ご注意

紅倉先生は大変ご多忙でいらつしやいます。寄せられた相談のすべてにお答えはできません。先生がこれは自分が相談に乗ってあげなければ決して解決できないと判断した相談に対してのみお答えくださいます。残念ながら相談の選に漏れた方はご自力で問題解決してください。

下記の電話番号におかけになり、オペレーターの指示に従って相談したい事柄をメッセージにお残してください。先生が鑑定の上、当選の方にはこちらからご連絡差し上げます。

電話番号 × × × × ? × × × ? × × × ×

相談料：時価。応相談。

どしどしお電話ください！

紅倉美姫先生に相談して、人生を幸せなものにしましょう！』

「怪しい。胡散臭すぎる」

だいたい何よ？、時価。応相談。って？ 明らかにボツたくる気満々じゃない？ 結婚したただの病から回復したただの、絶対にブライダル会社や画商とグルよ！ なんて悪い奴かしら？ どうせ金になりそうなお客だけ選んで連絡してくるのよ。たちの悪い新興宗教といっしょだわ。あーあー、ほんつとくに、落ちぶれたものねえ。心靈なんて物に関わってくるやかからはみんなろくなもんじゃないわね。

アホか悪党か、どっちかよ！

むかついた卷子はパタンと雑誌を閉じると次の雑誌を立ち読みすべく棚に戻そうとしたが、ふと見た前方のガラスの外壁に、女がべったり張り付いて卷子を見つめていた。

「うぎゃあっ」

いきなりたらこ唇のショッキングなアップにさすがに悲鳴を上げて雑誌を放り上げてしまった。

8. 「ンム」 part 3

奇声を発して商品を放り投げた卷子に

「お客さん、困りますよー」

やる気のない店員の嫌味な声が注意してきたが、卷子はそれどころではない。やっぱり、

怖いじゃないの、マジで。

幽霊なんて出てきたときだけ怖くて、後はうつとうしく立ってるだけだ、なんて思った自分が浅はかだった。怖いのは人である。幽霊だって、生前は生きていた人なんだから、恨みのこもった目でじいつと睨まれたら、そりゃあもう、はんぱなく怖いのである。

「ひええ〜」

卷子は心胆寒からしめて後ずさった。

「あわあわあわわわ」

怒ってる、マジで怒ってる。怖い。わたしがあなたに何したって言うのよ〜？ そりゃあいろいろ失礼は言ったかもしれないけれど、悪気があつての事じゃ（？）ないのよお〜？、だって、あなたが幽霊だっていうのが悪いのよ。そうよ、わたしにつきまとう幽霊のあなたが悪いのよ！ あわわわわわわ、ごめんなさい！、ひいひいひいひい……。

卷子が頭を抱えてうずくまると、ガラス壁にべったり張り付いていた女幽霊は、ガラスから離れ、スー……、と、入り口の方に向かった。

ドアの前で立ち止まってじっと中を見ている。

それをじいーっと見ていたバイト店員は。

「自動ドアじゃねえんだけどなー。気づかねえのかなあー」

と、呆けたことを言って面倒くさそうにレジカウンターから出て

きた。

「うわあゝゝ、馬鹿あゝゝ、開けるなあゝゝっ!!」

泡を食った卷子が決死の形相でタツクルして店員を止めた。

「うわあつ、なんだおまえ? やっぱり変質者か?」

「アホたれがあつ! 幽霊を店の中に入れるんじゃない! ていうか、ふつうに見えとんのかいいい?」

幽霊なんててつきり自分にしか見えてないと思ったら、見えてたのか? もしかして交通誘導の茶髪兄ちゃんもふつうに見えてて、ふつうに「どうぞー、足もとお気をつけてー」とか誘導してたんかい? 幽霊女を!? ええい、どいつもこいつも阿呆な男どもめ! ・
・と思つて卷子はハツとした。入り口で突つ立って恨めしそうにこちちを見ている女幽霊を見る。もしかして……

わたしよりこの不気味な幽霊の方が美人だつてえのか?

……フツ……

卷子の脳裏に幼き頃よりの思い出がよみがえつた。

現在彼氏いない歴2年、もうすぐ3年目に突入。別れた彼氏の最後の言葉は、「君のタフさにはついていけない」だった。可憐な乙女に向かつてなんちゅう言いぐさだ!

すっかり荒々しいぞんざいな言葉遣いになっている卷子だが、出身は広島や高知ではない。あーちゃんの広島弁はそこはかとなくかわゆい。卷子の出身は某越後の日本海に面する町である。

父よ、母よ、なにゆえわたしを「まきこ」と名付けた?

小学校の時からクラスメートにも常に「まきこさん」と敬称で呼ばれた。または「まあー、そのおー」とわざとらしいいわがれ声でもうお亡くなりになってずいぶん久しくお若い方には伝わりづらいギャグになっているが、ご近所出身の元総理大臣の影響力は今も絶大で、その娘の同じく政治家の「まきこさん」はそのお膝元の地では「お姫様」である。同じ「たなかまきこ」の名を持つ卷子も敬称で呼ばれるのは当然のことである。

かと言つて卷子が「たなかまきこさん」的ふてぶてしい押しの強

いお嬢様の性格というのでは…………… けっしてない。傷つきやすい繊細な心の乙女である。自分で言ってて笑っちゃうが。

しかししかし、いかに天下のたなかまきこさんでも幽霊相手では…………… いや、本物のたなかまきこさんなら「あんた何が言いてえの？ はつきり言いなっせ！」と一喝して、その迫力で幽霊を泣いて退散させるかもしれない……………。

いいえ違うのよ、だからわたしはたなかまきこじゃないのよお、たなかまきこだけど。か弱い乙女なのよおー、お願い、そんな怖い顔でいじめないでえ〜。

「ちよつとー、お客さーん、放してくださいーい」

バイトメガネに思いつきり嫌そうに言われた。フン、こつちだつてそこまで男に飢えてないわよ、アツカンベーだ。

ま、ここは大人の女性として事実確認。

「あなた、あの幽霊が見えている訳ね？」

「幽霊？ あの人が？」

メガネは卷子の言うことを疑いながら女を見た。女の卷子の目には明らかに不気味な、この世の物ではない恐ろしい物に見えるのに、どうやら男どものスケベに腐った目には普通の人間（の女）に見えるらしい。メガネの胡散臭そうな目は、卷子の方を不審人物として警察に通報しそうだ。

卷子は急にか弱い乙女の顔になって心細そうにメガネに訴えた。

「あの…、違うんでしょうか？ わたしあの人はずっとマンションから追いかけて逃げてきたんです」

「で、雑誌を立ち読みして、大声で雑誌のボケにツツコミを入れた？」

「…………… あ、ほんと〜に、あの人、普通の人に見えます？」
「えー……………」

メガネは迷惑そうに女を見て、はたと視線が固まった。表情までハッとしたように固まって、おいおい、なんだこの雰囲気は？ ホラーじゃないぞ？ 背景にお花模様のトーンでも張られていそう

だぞ？

メガネはキツと卷子を睨んで正義感に駆られた顔で言った。

「彼女に何をしたんです？ ひどく怯えているじゃないですか？」

えっ えっ えっ えっ えっ ……

そこまで言うかあ？ そんつなにわたしは、死人の幽霊女にも劣るか？ ……

卷子は困惑して殊勝なふりを続けて訴えた。

「あの、もしかしてえ、お互いに誤解があるんじゃないでしょうか？ あの……、それじゃあすみませんけれどあなた、外の彼女に話を聞いてきてもらえます？ ね？、お願いします」

「えー」

とか言いながら、外の女には心動かされるんだな、このメガネはクソ。

「分かりました。じゃあちよつと聞いてきますから、待っててください？」

メガネ店員はドアに向かい、向こうにドアを押すと……

卷子は店員の背に足をかけ、思い切り外に蹴り出した。

「うわっ とつとー。こら、女、てめえ何しやがる！？」

卷子はアスファルトにつんのめった店員が体勢を立て直す前にドアを引き戻し、「カチッ」とつまみを回してロックした。

「おおい！こらっ！ てめえマジで怒るぞ！ 警察に通報しちゃうぞ！」

「ええい、やかましい！ いいからあんたはその幽霊女を説得してみやがれ！」

メガネ店員はドアを叩くのをやめ、卷子を睨んでチツと舌打ちし、「あつたまおかしいんじゃないか？」

と聞こえよがしに言つて女の方を向いた。女もメガネに抱きつかれそうになってスーツと後退している。メガネは女に頭を下げて話しかけた。

「すみません、なんかあの人頭おかしいみたいで。あなたのことを

幽霊だなんて言うんですよ？　ハハハハ。おかしいですよね？」

卷子はじいっと二人の様子を観察していた。

へらへら笑っていたメガネの様子が変わった。突然怯えたように後ずさり、

「な、なんですか、ねえ？……………」

フン、ようやく女の恐ろしい正体に気がついたか、色ボケのガキが。メガネはこちらを向いて、必死の形相でドンドン、ドアを叩いた。

「おい！　こら！　開けろお！」

アツカンベー、と心の中でだけ言っやり、卷子は冷たく様子を見続けた。メガネは卷子にドアを開ける気がないと見ると振り返り、
「あわわ、うわああっ！」

と悲鳴を上げた。卷子の目には恐ろしい形相の女が男に取り付き

……………

メガネがぐるりとこちらを向いた。

「げっ」

目が死んでいる。明らかにおかしい表情で目を見開き、白目が灰色に濁って瞳孔が完全に開ききっている。気持ち悪い。

メガネは、「ドンッ！　ドンッ！」とドアを叩き、拳を握ると、
「ガンッ！　ガンッ！」とストレートに殴ってきた。卷子はびびった。明らかにおかしいうつろな表情でドアのガラスを殴り続け、強化ガラスには、皮膚の破けた血の跡が汚く塗りつけられた。おいおい、ここに来て今さらそんな本格ホラーな展開はないだろう？　女の幽霊はメガネの背後に立ってじっと、メガネが入り口を叩き破るのを待っている。ガラスには血の跡が重なって濃くなっていき……
「や！、やめろ！、わ、分かった！　鍵を開けるからやめさせなさいっ！！！」

男としてどこにもなんにも魅力を感じないメガネ君だが、こんなひどい目に遭わせるつもりもなかった。卷子はロックをひねり、慌てて逃げ道を探したが、ふと、床に投げ出された三流雑誌に目が留

まった。

・ ・ かつて史上最強の名を欲しいままにした ・ ・ ・

逃げ回るのも疲れた。

一か八か、賭けてみよう！、と思った。

9 電話

卷子は雑誌を拾い上げてくると、カウンターに駆け込み、店の電話の受話器を握った。ページをめくり、広告を開き、番号を調べる。ドアが開き、メガネ店員が入ってくると、ふつと白目を剥き、その場に崩れ落ちた。メガネ君の体が邪魔になってドアが開きっぱなしとなり、後ろから、女が悠々と入ってきた。

電話がつながった。

『お電話ありがとうございます。こちらは霊能力者紅倉美姫 心霊お悩み相談室です。相談事のある方は発信音の後に相談のメッセージをお残してください。当紅倉美姫が相談に乗るにふさわしいと判断したお客様にはこちらよりご連絡申し上げます。それでは発信音の後にまずお客様の氏名と電話番号、もしくはメールアドレスを……』

女の幽霊は迫ってきて、卷子は電話機をひつつかんで線の伸びる限り奥へ逃げ、だらだらおしゃべりするオペレーターに怒鳴った。

「うわあああつ！！！！ こっちはそんな悠長な状態じゃないのよ おおつ！！！！ 紅倉美姫！ あんたが昔の噂通り本物の最強霊能力者なら、わたしのピンチを察してさっさと電話に出やがれっ！！ うわあああつっ」

女が迫ってくるとゆらりゆらりと冷気が押し寄せてきて、卷子は腕にめいっばい鳥肌を立たせてわめいた。女はものすごく恨みのこもった目つきで卷子を見つめている。

「うわあああつ、早く出るおー！、馬鹿あああー！！！！」

『……………もしもし……………』

不機嫌な小さな声が聞こえ、その瞬間、卷子に迫ってきた女がぴたりと動きを止めた。卷子は直感的に、『本物だ……』と感じた。

「もしもし！ もしもし！ 紅倉美姫先生！？」

『あー、うるさい。耳が痛い。ちゃんと聞こえるわよー』

「先生！ 助けてください！ 今、めめめめめ、目の前に女の幽霊がああああつ！」

『うーーーーーん……………。100万円』

「はあ？」

『相談料。100万円』

「そんなお金ありません」

『月賦でいいわよ？』

「そんなお金払いたくありません」

『あつそ。じゃ、他を当たって』

じつと動きを止めていた女幽霊がますます怒ってゆらりとつこめいた。

「先生ーーーーーっ！……！」

『わたし明日乗馬の予定なのよねー』

じ、乗馬だと！？ セレブぶっこきやがって、この守銭奴が！

『100万円で、いい？』

「うううううむ、な、なんでもいいから、た、助けてーーーーっ！……！」

『はいはい。じゃ、その幽霊さん、電話に出して』

「は？ はあ……」

卷子はおそろおそろ受話器を女に差し出した。女は、受話器を受け取り、長い髪に隠れた耳に当てた。

「モシ モシ」

くわつと女の目が転がり出そうなほど見開かれ、卷子はひええええとつとつとけぞった。

女の姿が形を無くし、白い煙となって受話器のマイクに吸い込まれていき、宙に浮いた受話器が、ゴトリ、と、床に転がった。

『もしもし。おい。電話に出なさい』

卷子は逃げ腰になりながら、幽霊のつかんでいた受話器をえんが

ちよのように指でつまみ上げた。指先でつまんでぶら下げた受話器に
「もしもし?……」

と話しかけた。

『ハイ。分かりました。あのねえ、この人、あなたと同じマンションの住人ですって。12階の、佐伯さん?、昨日、なのかな?、恋人にDVを受けて殺されちゃったんですって。まだ死体がお風呂に入れたまままだそうだから、あなた、警察に連絡してあげてね?』

んじゃ、相談料100万円、よろしくね? お休みなさい』

「あのー、ちよと???」

電話は既に切れていた。

………

100万円用意しろと言っておきながらこっちの名前も電話番号も聞いていない。

「……………バツクレよう」

大呆けなやつめ。卷子は知らんぷりを決め込むことにした。つきまとう幽霊は消えた。電話は店の物で自分が掛けたという証拠はない。パジャマの裾で指紋をふきふきして証拠隠滅した。被害者と同じマンションとは言っても名乗りでなければ自分とは分かるまい。12階のお風呂で死んでいる佐伯さんには気の毒だけど……………、ま、そのうち同じ階の住人が気づくだろう。それまで待っているのは気持ち悪いけれど……………。

「いーじゃん、こっちだって、お化け関係で名前が出るような不名誉は嫌だもん。だいたいどう説明しろって言うのよ? 下手すりゃこっちが犯人に疑われちゃうじゃないの?」

卷子はそう決めて、すっきりした気分でマンションに帰ることにした。シャワーを浴びなおして、朝まで少しは眠れそうだ。

入り口で倒れているメガネ君にも申し訳ないけれど、またいで、そのまま立ち去ることにした。彼にはちよと後ろめたい気持ちもあるが……、この気持ちが恋に発展して、なんていうことは間違ってもないだろう。しばらくこの店には近づかないことにした。

10 マンション

マンションに帰ってきてみると、

大騒ぎになっていた。

パトカーで警察官が駆けつけ、警備会社の警備員も駆けつけていた。

近所の人たちが不安そうに道ばたからマンションを眺めていた。

彼らの話に聞き耳を立ててみたところ、マンション内で恐ろしい暴力事件があつたらしい。若い（よしよし）女の悲鳴が響き渡り、その尋常ならなさに住人が警備会社や警察に通報したようだ。話を聞いて卷子は、

「……………わたしだ、間違いなく……………」

と思い、どうしようどうしよう迷っているうち、あの役立たずの茶髪誘導員におせっかいに

「あ、あの人です！」

と指さされ、おまけに付近をパトロールしていたお巡りさんに入り口で倒れているところを発見されたメガネコンビニ店員に

「変なパジャマ女に思い出すのもおぞましいひどいことをされた」

と血塗れの手で訴えられ（わたしがやったわけじゃないだろう！）

、怖い顔の警察官達に取り囲まれ住人や近所の皆さんの白い目にさらされた卷子は、観念し、女幽霊に追いかけられていたことを白状したが、まあ予想通りまともに信じてもらえず、追いつめられて、けっきょく、

「12階で佐伯さんという女性がお風呂で殺されているはずです…

……………」

と告白し、驚いた警察官に半信半疑ながら調べられると、確かに、1205号室の一人暮らしの女性が殺されて浴槽に入れられているのが発見され、そりゃもうそれまでとは比べ物にならない大騒ぎになった。卷子は何故佐伯みどりが殺されているのを知っているのか

？もうしやれにならないほど厳しく尋問され、涙ながらに

「だからあ、本人の幽霊にさんざん追いかけて怖い思いをしたんだからあ〜」

と繰り返した。泣きながら卷子は、

くっそ〜、こんなことなら変な遠慮なんかしないでもつと大騒ぎしてマンション中の住人を叩き起こしてやるんだったあ！……………

と、大変悔しい思いをした。

けっきょくそのまま翌日（日にちつながりだが）まで警察署にこ厄介になることになり、佐伯みどりの殺害されたのが前日（日をまたいで前々日）の昼の時間で、その時間卷子は編集室でばりばり働いていたのを同僚達に証言してもらい、かつ、佐伯みどりを殺害した恋人がスピード逮捕され、男は卷子とまったくなんの関係もないらしいと見られ、ようやく午後になって解放された。

編集部に出すと、印刷所に入稿が済んだ後の和気あいあいとした雰囲気のところ、いやあ卷子さん、たいへんだったわねえ？、とハイテンションな笑顔で、

「で？ 幽霊、見ちゃったの？ どんなだった？」

と興味津々で訊かれた。

う〜〜〜〜、といじけていた卷子だったが、そうだわ、そうよね？、と思い直した。

わたしは、確かに、幽霊を見た！

事件は、わたしのおかげで、解決したんだから、もう幽霊に祟られる心配もないだろう。だったら、

思いっきり幽霊を見たことを自慢してもいいじゃない？！、と。

「今夜飲みに行くんでしょ？ みんな、おごってちょうだいよ？」

と、幽霊話を肴に思いっきり大好きな本生ビールを仲間達にたかってやるうと思った。

11 お礼参り

夜、さんざん飲んで酔っぱらった卷子が帰宅し、シャワーを浴びて出てくると、自慢のスマートフォンに電話がかかってきた。

相手は非通知だった。

卷子は首にバスタオルを掛け、じっと呼び出し音を発するスマートフォンを見つめていたが、もちろん非通知の相手に出るつもりはない。しかも、

ものすごく、嫌な予感がする。

卷子は昨日の一件で自分が靈感に目覚めてしまったのではないかと心配した。

呼び出し音が止まった。

卷子はほっとしたが、それを見透かすように再び鳴り出した。今度ももちろん非通知。卷子は、

絶対出るものか、

と心に固く誓った。すると、

大事なスマートフォンが白い煙を噴きだし始めた。

「うわあ~~~~っ、やみれええ~~~~っ!!!!!!」

卷子はスマートフォンをつまんで白い煙を払うように振った。

スマートフォンはまるで液体窒素（-196℃）につけられていたように盛大に煙を噴き、卷子に振られて宙に漂い出た煙は一つにまとまると、形を作り始め、それは、

佐伯みどりの幽霊となって卷子の前に立った。

「うえええ〜ん、なんでまた出てくんのよお~~~~」

卷子は先ほどの仲間達との飲み会で何をしゃべったかなあ？と思った。幽霊との遭遇をいろいろおもしろおかしく、かなり脚色を加えて、調子に乗ってべらべらしゃべりまくったような気がする……………。

何かまた怒らせてしまっただろうか……………

佐伯みどりの幽霊はじつと冷たい目で卷子を見つめている。昨日出てきたときはいかにも恐ろしく不気味だったが、今日は目つきは恐ろしいが、顔はきれいだ。写真で見た生前の佐伯みどりは、かなり、美人だった。（逮捕された恋人の男は「あいつが美しすぎるのが悪いんだあ」とかのたまっていたそうだ。）

えーえー、どうせわたしは幽霊にも劣る女ですう、あんたの勝ちです、だからもう、いいでしょう？

卷子はもう逃げ出すのもこりごりで、子供みたいにべそをかいだ。佐伯みどりがゆっくり腕を上げ、スマートフォンを指さした。

いつの間にか止まっていた呼び出し音が、三度鳴った。

非通知を確認して卷子は電話に出た。スマートフォンはすっかりアイスみたいになっていた。

「……もしもし………」

『もしもおゝし』

卷子は一気にむっつりした顔になった。

「あのですねえ、わたし考えてみたんですけど、あなたに相談したかったのは幽霊さんで、わたしは無理矢理相談するようにし向けたただけのように思うんですけどおゝし？」

電話の相手は、もちろん紅倉美姫だろう。どうやってこの番号を調べたんだか。

『なあに？ 相談料は幽霊に請求しろってこと？』

「まさしくその通りです！」

卷子は紅倉の返事を待った。

『ふうん…、そういうこと言うんだあ？ じゃあいいや、あなたがその人と話を付けなさい？ わたしはもう知らないから。じゃあねえー』

「えっ？ な、なに？ えゝゝつ、ちよつとおゝゝつ??？」

慌てたがもう遅い、紅倉は電話を切っていた。卷子は、ぞくりとした寒気に振り返った。

佐伯みどりは、

笑っていた。

「ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。ありがとうございました」

深々頭を下げられ、顔を上げると、佐伯みどりは微笑んだまま薄くなつて、姿を消した。

巻子は静かな部屋で呆然とした。

今のはいったい何だったのだろうか？

佐伯みどりはただ単に謝罪とお礼が言いたかっただけなのだろうか？ 彼女にそれを言わせるために紅倉は彼女を自分に送りつけてきたのだろうか？

佐伯みどりのすつきりした笑顔はとても巻子を恨んでいるように見えなかった。

「なんなのよ？」

巻子は文句を言ったが、巻子も笑ってしまった。100万円というのは深夜起こされた紅倉の意地悪な冗談だったのだろう。あんな口約束で払う義務もないだろうから、そう思うことに決めた。もう知らないと本人も言ってたし。

巻子は天井向かつて手を合わせて美人薄命を地でいった佐伯みどりの冥福を祈り、しかし、二度と幽霊に会うのなんかごめんだと思つた。

おわり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8761u/>

新・紅倉美姫 入りたがる女

2011年7月27日01時06分発行